



Title	中後期室町幕府の政治史研究
Author(s)	車谷, 航
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101571
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(車谷航)	
論文題名	中後期室町幕府の政治史研究
論文内容の要旨	
<p>本論文は、嘉吉の乱や明応の政変などの政治的諸問題の検討をつうじて、中後期室町幕府の政治史をみなおすことを目的とする。</p> <p>まず、「序章 問題の所在と本論文の視角」では、現在の室町幕府の政治史をめぐる研究において、室町期と戦国期との間で断絶がみられる現状を確認し、その要因を探るなかで問題の所在や本論文の視角を提示した。現在の室町期政治史の研究において、佐藤進一氏の「室町幕府論」が起点となることは周知のとおりであるが、その佐藤氏の議論がどのように継承されてきたのかという観点から研究史を整理した。佐藤氏は、室町幕府を論ずるにあたり、成立：南北朝時代、確立：応仁の乱以前、解体：応仁の乱以後と時期区分を設定した。そこでは、幕府による王朝権力の吸收という視角をもとに義教期までの將軍権力の内実が分析されたが、応仁の乱以後は若干の見通しを述べるにとどまった。このことは、以上の佐藤氏の視角を継承した富田正弘氏の公武統一政権論や、その成果を発展させた室町殿論がおおむね義教期までの分析でとどまっていることにもうかがえるように、佐藤氏の設定した時期区分自体が現在の研究に大きく影響を及ぼしている。一方で、佐藤氏が課題とした解体期の研究は、『室町幕府解体過程の研究』と題して今谷明氏が佐藤氏の視角を色濃く継承するかたちで発展させた。しかし、そのなかで今谷氏が継承した視角は、「京兆專制」論にもみられるように、「合議と専制」のせめぎ合いという論点だった。その後、応仁・文明の乱後の政治史研究は今谷氏の「京兆專制」の批判を展開した結果、当該期の研究では「合議と専制」の視角は失われた。しかし一方で、今谷氏が提起した戦国期において「なぜ室町幕府が存続したか」という問題は継承され、戦国期室町幕府論として独自の分野として発展した。佐藤氏のどの研究視角を継承するかという問題が、室町期と戦国期の政治史の断絶を生み出した一つの要因となっているのである。そこで、その断絶が明瞭にみられる嘉吉の乱から明応の政変の前後までの政治史（中後期室町幕府の政治史）をまずは実態的に問いかねることが求められるのである。加えて、嘉吉の乱後の政治史研究において大きな位置を占める百瀬今朝雄氏の「応仁・文明の乱」が、その前提として佐藤氏が「合議と専制」の視角で論じた足利義教論をふまえていることを確認した。そこでは、百瀬氏の研究以後、嘉吉の乱や明応の政変が政治史上の画期としてあまりにも固定的に設定されているなどの問題点を整理し、本論文において、政変を経ながらも現実の政治がどのように動いていたのかという視角から、政治史を実態的に論じるという課題を設定した。そして、佐藤氏が義教論のなかで若干触れながらも、その後あまり問題として継承されなかった幕府と天皇・朝廷との関係の展開を視角の一つとして設定することを述べた。</p> <p>第1章「嘉吉の乱後の政局と足利義勝の繼嗣」では、嘉吉の乱後の政治過程について、足利義勝の繼嗣をめぐる動きをつうじて再検討した。幕閣は、嘉吉の乱で足利義教が暗殺された直後、梶井門跡義承といった義教の御連枝ではなく、あえて幼少の義勝を繼嗣とした。管領による執政は、義勝の血統（義教流）への不安を克服するための措置という面が濃厚である。幼少の義勝を室町殿として擁立し、赤松追討戦を成し遂げた公武政権は、室町第移徙など義勝の代始儀礼を厳密に挙行し、義勝を歴代室町殿の系譜に位置づけた。また、政務においても義勝を觀念的に据えることで、管領畠山持国や伊勢貞國の主導によって室町殿の「上意」の再建がおこなわれた。しかし、義勝が没すると、弟義政が將軍家を継承する過程で室町第に移徒せず、烏丸殿に残留した。そのなかでは大方殿重子の「口入」がより活発となって管領畠山持国が主導する幕政と抵触し、さらには「三魔」などの政治勢力が活発化するなど、義勝期とは異なる問題がみられた。これらから、義勝期の政治過程は、決して義政期の前提ではなく、嘉吉の乱後の政治過程には段階差がみられたことが明らかとなった。</p> <p>第2章「嘉吉・文安年間における政務運営と公武政権」では、嘉吉・文安年間における公武間交渉のさまざまな事例を分析することで、公武における生きた意思決定のあり方を明らかにした。とくに、天皇が武家執奏の内容に不満だった場合や、執奏 자체が恣意的に留められて天皇のもとに正しく伝達されないなどのイレギュラーな事態が発生したときこそ伝奏の調整能力が必要となつた。しかし、伝奏だからといって、それぞれすべてが公武の複雑な調整をお</p>	

こなえたわけではなく、中山定親のように担当ではない案件にも起用され、やがて特定の個人が武家伝奏や惣伝奏として公武間交渉を一手に担うことにつながったと指摘した。また、天皇周囲でみられる内奏と大方殿日野重子の「口入」とが密接な関係にあることから、重子の「口入」について考察した。日野重子は、管領や伝奏をつうじた正規のルートではなく、天皇に内奏をおこないうる交渉ルートをもっていた。それらをふまえて、重子は伝奏などを経由しない公武間を横断しうる政治的存在であったことを明らかにした。

第3章「応仁・文明の乱後における足利義視・義材父子の将軍家継承と室町幕府」では、応仁・文明の乱後の今出川殿足利義視・義材父子の将軍家継承に注目し、明応の政変の前史としてとらえられがちであった政治過程の再検討をおこなった。還俗した義視は、文正の政変などにみられるように、「反義政の結集核」として擁立しうる人物であり、室町殿義政との和睦による応仁・文明の乱終結後も北陸の地域権力によって反乱軍の「將軍」として擁立される動きもみられた。そうしたなか、京都の将軍家の後継者問題で義材が繼嗣として選ばれたことは大きい。室町殿義尚の生存中にその猶子となることはかなわなかったが、義尚没後、義視・義材父子は上洛を果たした。義材は將軍家ゆかりの左馬頭に任じ、日野富子の庇護のみならず東山殿義政の猶子となって、義政没後に將軍家を継承した。反乱軍の盟主としての性格を有した義視・義材の将軍家継承の基盤は京都にあったのである。その後、義視と日野富子とのあいだで対立がみられるが、従来指摘されるような細川政元などを巻き込んだ香巌院清晃の擁立につながるものではなく、義材が將軍家を継承した延徳年間は、決して明応の政変の単なる前提ではないことを指摘した。

第4章「將軍廢立と明応の政変の政治的展開」では、細川政元らに擁立された清晃が政変から一年半後の明応3年（1494）になって元服・將軍宣下を果たした事実に注目し、將軍廢立の実態が明応の政変とその後の政治過程に及ぼした影響について明らかにした。細川政元は、香巌院清晃を擁立したものの、公武間交渉の結果、清晃への將軍宣下は後土御門天皇の意思により見送られた。結果、事実においても、諸人の意識においても將軍は依然として河内正覚寺に籠城中の足利義材であった。周知のとおり、河内合戦が展開するが、そのなかでは赤松政則を介した細川政元一將軍義材間の和平交渉が展開した。新主義遐を義材の猶子とすることや、両畠山氏の和睦などは、政元にとどめ現実的な和平案であり、その和平案は明応の政変後も戦後処理の基調となった。義材投降というかたちにはなったが、政元は義材との協調関係に転じ、義材の求めに応じて伊勢氏の排除にも踏み切った。そして義材が北陸へ下向したのちは、再び赤松政則を介して義材を京都へ呼び戻そうとはかり、そしてそれは足利義高（義遐より改名）の元服・將軍宣下に優先しておこなわれたのである。

第5章「明応年間における和平交渉の展開と「二人の將軍」」では、近年注目されていた明応年間における細川政元と足利義材の和平交渉の実態について明らかにした。和平の動き自体は、明応の政変直後から京方内部にすでにみられていた。越中の義材は細川政元追討の旗揚げをするものの、頼みの軍事力は遠く九州にあり、膝下の北陸では従来指摘されるほど軍勢の編成は容易には運ばず、ねじれが生じていた。美濃の斎藤妙純が討死すると、義材方も和平に傾いた。この和平は、義材が京都に戻ることを前提として交渉が進み、將軍足利義高の存在はその交渉のなかに見出しえないことが特徴の一つである。和平交渉は両畠山氏の紛争の激化で決裂となり、義材を武力上洛へと駆り立てた。義材は入京に失敗するものの、周防に入国することで直接、西国・九州勢と結びつくこととなり、文亀年間（1501～1504）以降、二人の將軍間での抗争はあらたな段階へと進んでいくのである。

補論「明応の政変後における政治情勢の展開と越前朝倉氏」では、明応の政変後の政治情勢について越前朝倉氏の動向を位置づけて論じた。朝倉氏は、明応の政変以前において多様な外交ルートを選択して室町幕府と交渉しており、政変において、従来指摘されるように朝倉氏の総意として細川政元に対して派兵したわけではないことを指摘した。また、政変後においても朝倉氏は京方とも外交を展開し、義材を直接に支援する地域権力ではないことを明らかにし、義材の影響力は北陸と西国とでは地域差があることをみた。

終章では、以上の各章の概要を述べたうえで、成果をまとめた。一つは、政変を経ても政治過程が急激に展開することではなく、嘉吉の乱後の足利義勝の擁立過程にみるように、義教の例に倣って上意を盛り立てていこうとの動きがみられる。むしろ政治史上の変化は、義勝没後の義政擁立過程にみえるのであり、嘉吉3年の義勝死没に一つの画期を設けるべきである。明応の政変においても、將軍足利義材を廢位することができなかつたことが影響し、細川政元は越中に下国した義材と和平を結んだうえで、義材の帰洛を望んでいた。政変後の政治過程は、細川政元が義材と和平を結び、義材を京都に戻そうとする過程としてとらえるべきであろう。二つは、嘉吉の乱における畠山持国、公武間交渉を担った中山定親らの事例をもとに、管領や伝奏のそれぞれの個性に注目して政治史は論じいかなければならない点を確認した。また最後に、本論文で視角とした公武関係の論点をもとに、戦国期政治史への展望を述べた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名(車谷航)	
	(職) 氏名
論文審査担当者	主査 大阪大学 教授 伴瀬 明美 副査 大阪大学 教授 市 大樹 副査 大阪大学 名誉教授 川合 康 副査

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 中後期室町幕府の政治史研究

学位申請者 車谷 航

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 伴瀬 明美
副査 大阪大学教授 市 大樹
副査 大阪大学名誉教授 川合 康

【論文内容の要旨】

本論文は、嘉吉の乱から明応の政変後にいたる 15 世紀の室町中後期の政治史を、室町幕府儀礼や朝廷の政治的動向、対抗しあう軍事勢力間の協調・和平の模索などの側面に注目しつつ、一次史料から詳細に明らかにし、室町期と戦国期の政治史を通時的にとらえるための視角を提示しようとしたものである。全 5 章と補論、序章・終章からなり、枚数は約 490 枚（400 字換算）である。

序章「問題の所在と本論文の視角」では、戦後の室町幕府政治史研究の研究史を総括し、室町期政治史を通時的に論じることを困難にしている研究状況を克服するためには、室町中後期の幕府政治史の検討が不可欠になつていると指摘したうえで、將軍権力と管領・大名権力を対立的な観点から固定的にとらえるのではなく、現実の流動的な政治過程を実態的にとらえること、そして、嘉吉の乱後の政治史においても、天皇・公家の政治的動向に注意して分析すること、の二つを研究視角として提示する。

第一章「嘉吉の乱後の政局と足利義勝の継嗣」では、これまで管領政治期と一括して理解されてきた嘉吉の乱後の將軍義勝・義政幼少期の政治史を、「移徙」や「評定始」などの幕府儀礼や政務の在り方から検討し、管領をはじめとする幕閣が幼少の將軍であるにもかかわらず、その「上意」を意識的に示そうとしていた義勝の段階と、生母日野重子をはじめ側近集団による政治介入が展開する義政幼少期の段階との違いを明らかにし、幼少期の義政が室町第に「移徙」せずに烏丸殿に住み続けたことで、前代とは異なる人的関係が形成されたことを論じた。

第二章「嘉吉・文安年間における政務運営と公武政權」では、嘉吉の乱後の嘉吉・文安年間における公武間交渉、政務運営の実態を、伝奏・管領を通じた公武間での意見のすり合わせの過程に注目して検討した。天皇の勅定はこの段階の公武政權においても重要視され、天皇が武家側の提案に勅答を遅らせて不満を示したり、武家の伝奏を通じた天皇への申し入れが、女房による内奏の過程で異なる内容に変更されたりするなどの問題が生じていたことを指摘した。そして日野重子の政務介入は、天皇への内奏ルートを通じてなされていたことを論じた。

第三章「応仁・文明の乱後における足利義視・義材父子の將軍家継承と室町幕府 —明応の政変前史の再検討—」では、応仁・文明の乱で足利義政と対立した義視の嫡子義材が、乱後に將軍家の継嗣になることができた政治的基盤を検討し、義材が義政の猶子として將軍家を継承したことや、將軍家重代の鎧「御小袖」が義材のもとに移されていたこと、義視・義材は細川政元を政務に留まらせようとしたことなどを指摘し、義視・義材と義政・政

元ら幕府方とが一貫した対立関係にあり、それを明応の政変に帰結させる従来の政治史理解に再考を迫った。

第四章「將軍廢立と明応の政変の政治的展開」では、將軍権力を崩壊させ、細川政元政権を確立させた事件として評価されてきた明応の政変の政治過程を、將軍の廢立という観点から検討し直し、足利義材を廢して足利義遐を新將軍に擁立しようとした政元は、後土御門天皇から將軍宣下を保留されると、義遐を義材の猶子とする方向で義材と和平を進め、義材が北陸に逃走してからも和平して帰京させる工作を進めていたことを明らかにした。

第五章「明応年間における和平交渉の展開と「二人の將軍」」では、明応の政変後に「二人の將軍」が並立したという政治史理解を批判して、北陸に逃れた義材と京の細川政元の和平交渉は、むしろ義材に有利な条件で進められていたことを明らかにし、義材が上洛に失敗して周防国大内氏のもとに逃れたことによって和平交渉が打ち切られ、結果として「二人の將軍」のもとに諸大名が系列化して抗争する事態が生まれたことを指摘した。

補論「明応の政変後における政治情勢の展開と越前朝倉氏—義材派としての位置づけを超えて—」では、足利義材の有力与党として理解されてきた朝倉氏は、義材方・京方ともに外交ルートをもっており、決して義材方・京方という括りではとらえられないことを、越前国や周辺諸国の地域秩序の動向を踏まえて論じた。

終章「本論文の成果と課題・展望」では、本論文の成果をまとめたうえで、応仁・文明の乱における政務の実態や乱後の復興、戦国期の公武関係の検討などを、今後の課題として提示した。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の第一の成果は、嘉吉の乱から明応の政変後にいたる室町中後期の政治史を、將軍権力と管領・大名権力を対立勢力として固定的にとらえるのではなく、両者の協調や和平という新たな観点から一次史料を綿密に検討することによって、従来は管領政治期とされてきた義勝・義政幼少期の政務の在り方や、予定調和的に理解されてきた明応の政変の展開を、揺れ動く政治過程として動態的に把握することに成功した点である。この成果により、戦後以来長く室町幕府研究を規定し続けてきた將軍と管領の対立を自明視する視角は、大きな修正を迫られることになると思われる。

第二の成果は、足利義満が王朝国家権力を吸収したとする通説的理解の影響によって、義満以降をあつかう室町幕府研究が天皇・朝廷の動向を十分に組み込んでこなかったという研究史上の弱点を踏まえて、嘉吉の乱後の政史分析においても朝廷内の動きや管領・伝奏の人物の個性までを視野に入れ、実証的に検討を進めた点である。そしてこれに関連して、將軍義政の生母日野重子の政務介入が、天皇への内奏ルートを通じてなされていたことを明らかにし、將軍権力の代行者として介入したと理解してきた従来の見解を鮮やかに批判した。

第三の成果は、「移徙」や「評定始」という幕府儀礼の在り方や、足利家重代の鎧である「御小袖」の継承など、これまで政治史研究ではあまり注目されてこなかった事象を、將軍権力を莊厳化する政治的動向として、室町中後期の政史に積極的に位置づけた点である。近年、盛んになりつつある儀礼研究を、制度史や権力構造論としてではなく、政治史研究に応用した研究として注目に値すると思われる。

本論文は以上のような優れた成果をあげているが、問題点がないわけではない。例えば、本論文は嘉吉の乱後から明応の政変後までをとりあげているが、足利義政親政期から応仁・文明の乱の期間の分析を欠いており、その間の政務処理や將軍権力の在り方が論じられていない点である。そこが論じられない限り、室町期と戦国期の政史の断絶を完全に克服することはできないと思われる。また、天皇への内奏についても、どの時代にも見られることであり、室町中後期固有の歴史的特質が明確になっていないことなども、課題としてあげられよう。とはいえ、こうした課題は、本論文の成果を踏まえて今後検討を重ねることで、明らかにされるものと思われる。

以上の理由から、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。